

日本發送電會社建設部と

新井榮吉博士の辭職

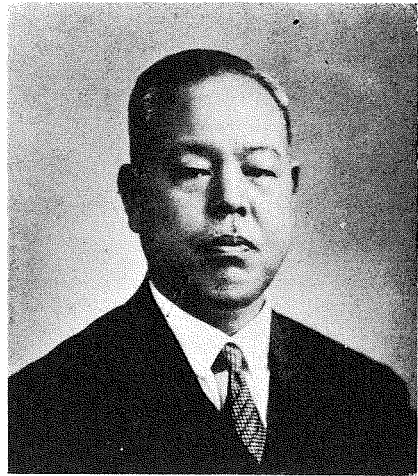
新井榮吉博士が病氣の故を以て日本發送電會社の建設部長の職を辭した事は、會社が國策線上の大會社であり、創立後、日の浅い事であり、且つ建設部の生みの親として多大の期待をかけられてゐた時局的人物であつた丈に、何人も意外の感にうたれたのである。

元來日本發送電會社は毎年2億圓とか3億圓とか、の建設工事を施行して行かねばならない大仕事を持つてゐるのであるから、發送電會社は一の巨大な建設會社なのである。それ故世人は建設部に對し特種の強權を認めてゐたのであるが、最初の機構を誤つたが爲に、建設部を他の各部と同一のものとしてしまつた。之では建設工事の經營に練達の新井博士と雖も仕事が仕難い、病氣になるのも當然と思はれる。

然し乍ら、平素健康そのものゝ如く見ゆる新井博士が、僅かの病氣で辭職する事は、餘りに執著が過ぎる、土木技術家には何うも難局を凌ぐと云ふ頑張りとか、ねばりとかゞ足りないのではないか、しかし博士の辭職には簡単に説明出來ない何等か深い事情が伏在するのかも知れない、兎に角惜むべき事である。

新井博士の如き人格と學識と俱に兼備せる人である丈に、此の國家の大事業に何とかして、もつと盡力して貰ひ度いと思ふのは多數の要望である。

何事でも創業當時は骨の折れるものである。事業が大であり、機構が複雑なる程、愈々以て骨の折れるものである。日本發送電會社なども一財閥の一系統の會社なら仕事も樂に進められるが、各方面からの中堅人物の寄り集りであり、尙ほ電氣廳と云ふものゝ監督と指令をうけるのであるから、仕事の無圖々しいのは當然である。然し此の位の事は新井博士



新井榮吉博士

も最初より豫期した處であつたらうと思ふ、然し病氣には勝てぬ、新井博士は遂に健康を害したのである。

最近發送電會社の機構は改革され、元の建設部を擴大強化されたとの事であるが、事實は元の建設部を土木工部、機械工部、電氣工部の三部に分割された丈である。毎年3億圓餘の水力建設工事を施行しなければならぬ土木工部が、果して之で以て強化されたのであらうか、若し眞に豫定通りの水力電氣を開発せんとするならば、茲數年間土木工部本位の強化を必要とするのではないか。要するに建設工事を軽く見る事は、現在の發送電會社として最も大なる誤謬であらうと思はれる。

昨年の湯水から、火力發電の石炭不足が世間の問題となり、水力建設の方は兎角表面的に扱はれてゐないが、現状を以て數年後の水力發電豫定が果して可能なりや否やが、寧ろ今からの重大な問題であらう。

× × ×

記者が代々木初臺の邸に靜養中の新井博士を訪ねたのは、まだ肌寒い春3月の中旬であつた。靜かな應接間で大火鉢を圍んで語る博士の溫容には病氣らしい何物も見えないが、神經痛と物療指壓法の効能を一時間餘りも聞かされた、新井博士の経過は頗るよく、體重も2貫を減じて16貫になり、神經痛も大分良くなつたとの事であつた。